

國學院大學學術情報リポジトリ

研究ノート「査読付き」 中学校体育における武道授業(杖道)の具体化

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 植原, 吉朗 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001340

〔研究ノート〕

中学校体育における武道授業（杖道）の具体化

植原 吉朗

【要旨】

平成24年度より中学校の体育実技において、武道種目はダンスと共に必修として扱うことが学習指導要領に明記された。学校現場では実施環境や用具の整備、指導者の養成や確保などを重ね何とか実施が定着しつつあるが、多くは従来から実施実績のある柔道や剣道の実施に偏っており、地域の特性を活かした種目の多様性や、日本の伝統的身体文化の修得・継承にまで発展性を企図した実践は散見されるのみである。本稿では、認知度は低いが体育的側面や実施簡便性、伝統文化修得手段としても優れる杖道の中学校体育への導入事例と筆者の実践から、具体的な指導計画について提言を試みる。

【キーワード】

中学校体育 武道授業 杖道 指導計画 評価

1. はじめに

平成18年12月の教育基本法全面改正、平成20年1月の中央教育審議会答申を受けて同3月に文部科学省から出された改訂・中学校学習指導要領（2008）には、平成24年から中学校の保健体育科においてダンスと共に武道を必修として扱うことが明記された。そこには、「武道は武技・武術から発生した我が国固有の文化であり、相手の動きに応じて、基本動作や基本となる技を身に付け、相手を攻撃したり相手の技を防御したりすることによって、勝敗を競い合う楽しさや喜びを味わうことのできる運動である。また、武道に積極的に取り組むことを通して、武道の伝統的な考え方を理解し、相手を尊重して練習や試合ができるようにすることを重視する運動である」と記載されており、武道が学校体育において極めて有効であることをあらためて示していると言える（中村、2010）。

しかしながら教育現場で導入・実践されている武道系の種目といえば、従来の学習指導要領に例示記載されている柔道、剣道、相撲などが主で（鬼澤、2009）、文部科学省委託の「武道等指導推進事業」調査報告書（2015）によれば、中学校での武道種目実施学年は主として第1・2学年、実施種目は柔道が63.4%、剣道が34.1%、相撲が3.5%、その他が1.9%と示されている。

前出の中学校学習指導要領では「地域や学校の実態に応じて、なぎなたなどのその他の武道についても履修させることができることとしているが、なぎなたを取り上げる場合は、基本動作や基本となる技を身に付けさせるとともに、形を取り入れるなどの工夫をし、効果的、継続的な学

習ができるようにすることが大切である」と記載があるにもかかわらず、弓道、なぎなた、合気道、空手など、けっして規制されているわけではない他種目の学習指導計画の提案はなかなか日の目を見ない傾向がある。特に杖道については、類似した技術体系を有する剣道において優れた指導資料が全日本剣道連盟から提示されているにもかかわらず（2009）、武道学研究の分野においてさえ実践研究事例がみられなかった。

そこで杖道三段（剣道教士七段）を有する筆者は、日本武道学会第43回大会（2010）にて「杖道の学校体育への導入可能性について」と題し発表、また阿部も本誌（2011）に「武道授業における杖道導入へのとりくみ」を発表、学校体育における杖道の実践事例を紹介し、その教育的価値や有用性について広く理解されることを企図したが、その後は杖道の学校体育での実践研究は見られていない。またこれらの発表は、主として大学生の教養系の体育実技科目として実施された成果を基に報告されているもので、中学校体育で必修化された武道種目の一つとして杖道を検討するには、特に施設環境や用具整備、専門指導者の存否などの条件面で、必ずしも妥当でない部分があることも否めなかった。

実は、平成19年から21年にかけて広島県東広島市立志和中学校において「和文化教育実践事例」として中学校での杖道授業の実践事例が報告されている（2008, 2010）。実際の授業展開が具体的に記されていて教育現場に応用する上でもたいへん優れたものであるが（後述、本稿3.）、この報告は市の「伝統文化伝承事業推進指定」を受けてのものであり、人的・物的支援があつてこそ成果とも考えられる。

本稿では、この広島での実践例を尊重し、筆者の大学体育での実践経験も踏まえ、中学校体育で適用可能な具体的指導計画について提言をする。

2. 杖道について（概略）

杖道は、長さ128cm、直径2.4cmの白樫製の「杖」と太刀（木刀）を用い二人一組で稽古・試合をする形武道で、攻撃を主とせず相手の攻撃に応じて変化し制圧するのが本旨とされる。17世紀初頭、夢想権之助によって創始された神道夢想流杖術が起源と言われている。昭和31年に杖道組織は全日本剣道連盟傘下となり、同43年に太刀を「打」、杖を「仕」とする12本の形が制定された。試合は、2組の出場者が規定の術技を演武し、「充実した氣勢」、「正しい姿」、「正確な打突と強弱」、「間合」、「礼法」などを審判員が判定し勝敗を決する。

運動の特性としては、左右を均等に用いた動作、日常生活では経験することの少ない体のひねりや伸ばしを体感できる点などが挙げられる。また、対人動作（太刀対杖）の攻防にストーリー性（理合）があり、ここから武道としての身体文化性を理解できることが期待される。また剣道とは異なり防具を着用しないため、相手を傷つけぬよう互いの呼吸や間を合わせる必要性があり、真剣に対峙しなければならない。阿部（2011）は「相手を尊重して練習や試合ができるようにすることを重視する運動として、人間関係の構築においても非常に有意義である」と指摘する。さ

らに、老若男女問わず実践できるため、世代間・性別間の交流においても有意義なものとなり得る特徴を持っている。

まとめると、杖道の体育的意義はおよそ以下の4点を挙げることができる。

1. 身体的バランスのとれたからだづくりができる

（左右の手足をさまざまな角度から同じように使うので、偏向性がなく、身体運用面での自由度が高い）

2. 体力や健康度に恵まれない者でも、無理なく稽古することができる（形武道の特性）

（青少年のみならず、中高年からも開始・継続が可能）

3. 男女混合・同時に実施できる（体力に頼った「力まかせ」の武道ではないから）

4. 日本の伝統・文化に触れる機会となりうる（所作、礼法、精神性など）

杖道の技、専門用語などの解説は、全日本剣道連盟杖道解説（2003）に詳しいので、本稿では割愛する。

また、必修武道授業としての実施を考えた時、以下のような利点を指摘することができよう。

- ・指導者の育成：未経験教員でも専門指導者の協力を得て比較的短期間で自身が学習・修練しながら授業展開を推進できる可能性がある。
- ・武道場の整備：武道専用のスペースを要しない。通常の体育館で実施可能である。
- ・用具の確保：基本的に杖と木刀のみで、着衣も体育着で十分である。防具、道着、畳などに比べ安価に準備でき保管も維持管理も容易である。

3. 中学校体育における杖道の実践事例、指導計画

杖道を学校体育に導入（教材化）した嚆矢は、これまで公にされた資料を見る限り、東広島市立志和中学校前校長であられた前原敏雄氏（故人、杖道教士七段）であると推察される。前原氏は平成21年度文部科学省「武道・ダンス必修化に向けた地域連携指導実践校」（2010）の指定を受け、正式に杖道の教材化に取り組んだことが、全日本剣道連盟機関誌『剣窓』（2010）にも記録されている。実践の取り組み自体はそれ以前から、市の教育委員会の協力を得て実施されていた。前出の東広島市立志和中学校『和文化学習の創造』（2008）に示されている事例はその一つである。

まず、この杖道授業の取り組みについて、二教諭による学習指導計画を概観する。志和中学校で杖道に充てている時間数は第1学年で10時間、第2・3学年は15時間であった。以下に示す事例は、第1学年31名の授業である。

（1）教材観について

最初に、中学校学習指導要領にある記載から、武道の特長を明記している。その上で、杖道は「人を殺さず、傷つけることなく、しかも己の身を全うする」ことを目的とした武道であることを示し、「攻防する技を習得した喜びや相手の動きや技に対して息の合った攻防をすることによ

り、勝敗を競う楽しさを味わうことができるようにするとともに、杖道に対する伝統的な考え方を理解し、それに基づく所作を身に付けさせることのできる教材である」こと、また、武道の学習を通して、日本の伝統文化のよさに気づき、それを習得することによって自分自身に自信や誇りを持つことができ、それが他国の文化や歴史を尊重したり、その国の人々を理解しようとしたりすることにつながり思考力や表現力を高めることにもつながると考えている。

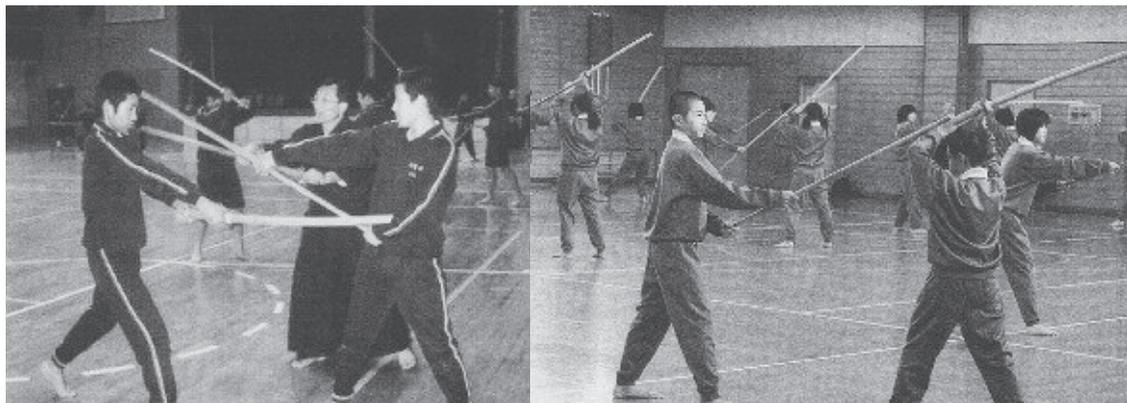


図1、中学生の杖道授業（写真提供：前原敏雄氏・東広島市立志和中学校前校長）

（2）指導観について

指導にあたっては、「杖道は精神修養と身体の鍛錬を第一義とし、けっして手足の技ではなく心の技で、その目的は精神修養にある」という杖道の精神を理解し、自他の安全に気をつけながら相手を尊重して練習したり演武を行ったりする気持ちや態度を養いたいとしている。

また、構えや動き方を理解し練習を積み重ねることで基本を習得し、この習得した基本を得意技につなげることで自信を持たせたり、生徒それぞれの個性を表現できるようにしていく。そして、将来の生き方や思考力・表現力を高めることにつなげることを狙う。

さらに、生徒の技を習得したいという意欲を大切に、個々の技術を高める指導をするとともに、技能の上達にともないペアやグループで互いに教え合い意欲的に学習していく態度を育てていく。

（3）単元目標

単元目標は、以下のように設定された。

- ①相手を尊重し、仲間と教え合い・助け合い・励まし合いながら、互いに協力して自主的に練習や試合ができるようにする。
- ②課題解決のための学習計画を立て、練習や試合を通して互いに協力しながら課題解決に取り組む、学ぶ楽しさや技能を習得する喜びを味わうことができるようにする。
- ③自己の能力に課題をもち、相手との攻防を通じた練習の中で、基本動作や対人的技能を身につけるとともに、試合ができるようにする。

④武道の特性や伝統的な考えや行動の仕方を学び、規則やきまりを守り、互いに相手を尊重し、公正な態度で練習や試合ができるようにする。

(4)「学習の展開」例

表1. は、第1学年（10時間設定）の6時間目の「学習の展開」例である。単元の前半で基本の所作・礼法を習得し、杖を操作する「単独の基本」の二本の復習から、若干の困難を伴う三本目（「引落打」）を習得する段階に入る計画であることが窺える。

ただ、この事例は2名の教諭が担当していて、31名への一斉指導では杖道経験の浅い教諭が単独で指導することは困難であることが推察された。

表1. 第1学年6時間目の、杖道授業展開例（『和文化学習の創造』2008より）

(1) 本時の目標 ・引落打の構え、引落打（右・左）を理解する。 ・引落の構えより「打」の顔面を打つ、あるいは太刀を引き落とし、顔面を攻める技を習得する。				
(2) 観点別評価規準 ア 引落の構えから引落打を習得することができたか。 (技能・理解) イ 大きな声を出し、意欲的に練習に取り組むことができたか。 (関心・意欲) ウ 集中して話を聞き、ポイントを意識して練習に取り組むことができたか。 (思考・判断・態度) エ 自他の安全に留意して練習に取り組むことができたか。 (判断・態度)				
(3) 準備物 杖 31本、ふりかえりカード				
(4) 学習の展開				
学 習 活 動	指導上の留意点 (◇) (◆「努力を要する」と判断した生徒への指導の手立て)		評 価 規 準	評 価 方 法
	T I 教 師	G T 教 師		
○準備体操 ○集合・出席 ・健康確認 ○挨拶（立杖） ○本時の学習過程を確認	◇リーダーを中心に準備運動を行わせる。	◇G Tの指導で行う。 ◇本時の内容、流れを知らせ確認させる。	イ	観察
○前時の復習 ・常、本手、逆手の構え ・本手打ち ・逆手打ち ○引落の構え 引落打	◆杖先の高さ・握りなど正しい動作が身につけていない生徒に助言をする。 ◇大きな声で発声し、練習させる。	◆基本の構えが正しくできるよう姿勢の確認をする。 ◇打ち終わった構えの姿勢を確認させる。 ◆正しい動作が身につけていない生徒へ助言をする。 ◇杖の持ち方や手首の使い方・体勢・足さばき等を理解させる。	イ ウ エ	観察 観察 学習 カード
ま と ○学習の反省:助言 ○次時の学習内容確認 ○挨拶（立杖） ○学習カードの指示	◇本時の感想をカードに記入させ、提出させる。	◇本時の授業の気づき等について助言する。 ◇次時の学習内容を知らせる。	ウ エ	学習 カード

(5) 技能評価の着眼点

表2. 杖道授業、技能評価の着眼点（『和文化学習の創造』2008より）

運動技能（姿勢・構え・基本・形）の評価の着眼点		着眼点	
1) 姿勢・構え・基本			
杖	礼法	座 礼	正座・太刀、鉤を右座頭、刃内側にして置く 杖、中心部を体側中央、拳一握り踵し置く 姿勢を正し、両手を同時に膝の前に八字形に上体を曲げて行い、礼が終わったら両手を元に
		立 礼	常の構え 提杖で体を約15度傾け相手を直視 おもむろに復元（常の構え）
	姿勢	正 座	左座右起 背筋の伸び 心の落ちつき
		立 杖	背筋の伸び 軸のある自然体 杖尾は右足小指の外
		提 杖	背筋の伸び 軸のある自然体 杖尾は後肩
	構え	常の構え	背筋の伸び 軸のある自然体 杖先へその高さで静止
		本手の構え	杖先相手の 目の高さ 手幅杖の四分の一 右自然体（やや半身） 左手へそ前 手の内 踵を床に付けない
		逆手の構え	杖先相手の 目の高さ 手幅杖の四分の一 右自然体（やや半身） 左手へそ前 手の内 踵を床に付けない
	基本	引落の構え	真半身 足幅二足長 左手親指付け根が左乳部に 踵を床に付けない
		本手打	両手いっぱいにとり、足を踏み出すと同時に、後方から上に回し、顔面を打つ手幅の四分の一 手の内小指のしめ 踵を床に付けない
逆手打		両手いっぱいにとり、足を踏み出すと同時に、後方から上に回し顔面を打つ手幅杖の四分の一 手の内小指のしめ 踵を床に付けない	
引落打		真半身正しい引落の構え、前足はやや斜め前を向き、膝は内股にならず軽く曲げる 後ろ足は自然に伸ばす 顔面を打つ 踵を床に付けない	
返し突		腰を十分に捻り（両足先の向きを変え） 杖先は水月の高さ 後手は突手水月を突く 踵を床に付けない	
突外打	頭上に両手いっぱい取る 体捌きしながら真半身左座頭上後ろ杖先下方 両手肩幅 右本手で太刀を打ち落とし顔面を攻める		
太刀	姿勢	提刀	太刀を右手に、刃は上にして鉤元付近を軽く握り、自然に下げる 親指は纏にかけない。
		携刀	左手親指は纏にかける 柄頭が正中線上 切っ先約45度後ろ下がり 左親指の付け根を腰骨の上に軽くつけ太刀を携える
		帯刀	柄頭を正中線上
	構え	刀=木刀	木刀といえども真剣と考え、取り扱いは常に刀と同様に扱わせる。
		中段の構え	右足前 左拳へそ前一握り前 剣先の延長は両腕中央 踵を床に付けない
		前手中段の構え	左足前 左拳左額前一握り 剣先は約45度の上方やや右に寄る 踵を床に付けない
		八相の構え	左足前 刃先は相手に向く 鉤は口の高さ一握り踵す 左拳は正中線 刀身傾き約45度 踵を床に付けない
		脇構え	右足後 太刀を右脇にとる 刃先右斜め下に向く 剣先は膝下10cm位 左拳へその右斜め下一握り 踵を床に付けない
構えの解き方	相手の右膝頭から5センチ位下に 自然に右斜め下に下げる 踵を床に付けない		
仕打交代		「仕」常の構え・「打」携刀で中央線へ 互いに立てて差し出し互いの下を取って 交換 「打」左へ半歩移動、刃を上にしたが持ち替え提刀 「仕」左に半歩移動、右手に持ち替え常の構え 両者直進し、右回りで正対	
気合い		杖 仕 杖は打ち込む時「エイッ」 突く時「ホオッ」と発声する 太刀 打 太刀は「エイッ」と発声する	
形			
	(打) 太刀	(仕) 杖	
一本目「着杖」	①正しい八相の構えから間合に入り水平まで切っているか ②正しい左上段に構えているか	①右斜め後ろに捌いた姿勢はどうか ②杖を右斜め上方より大きく回して相手の左小手を打っているか ③正しい本手打ちで相手の左小手を打っているか	
二本目「水月」	①相手の正面を正しく切っているか ②八相より十分間合いをとって正しく中段に構えているか	①体を右斜め前に捌き、左腰をやや後ろに引き正しく水月を突いているか ②正しく引落としの構えになっているか ③引落打の強さはどうか	
三本目「引提」	①太刀を等分に杖と合わせているか ②左上段から正しく正面を切っているか ③正しく繰り付けられているか	①合わせた杖先は太刀と等分になっているか ②正しい繰り付けから正しく水月を突いているか	
四本目「斜面」	①正面を正しく水平まで切っているか ②間合を十分とり正しい左上段になっているか	①体を斜め前に捌き杖を四等分して位置で正しく相手のこめかみ打っているか ②正しく水月を突いているか	
五本目「左貫」	①正しく水月を突いているか ②太刀を打たれて退く場合、右、左、右と退いているか ③八相、中段の構えは正しいか	①突いてきた太刀を真半身になって適正な間合に退いている ②太刀を打った時、右足が出ているか ③左足を右足に揃え	

評価の着眼点は杖道の指導書でも具体的明確に示されたものが見当たらないが、表2.には体系的かつ明確に示されており、これらが指導者側のみならず学習者にとっても重要であることは論を待たない。

(6)「学習カード」の記入指導

生徒の学習記録、また「気づき」「ふりかえり」のための「学習カード」も、表3.のように用意された。表3.は1単元10時間の事例である。

表3. 生徒が記入する「学習カード」、右端は自由記述（『和文化教育実践事例集』2010より）

自己評価カード		自己評価 A:よくできた B:できた C:あまりできなかった			
時間	学習内容		A	B	C
1	ビデオ観賞	・「杖道」について知ることで武道について興味を持ったか	A	B	C
2	杖道の特性・礼法・姿勢・構えの基本 常の構え・本手の構え・逆手の構え 引き落としの構え・杖の構え・基本技・単独動作 「本手打ち」「逆手打ち」「引き落とし打ち」	・真剣に稽古できたか	A	B	C
3		・礼法・姿勢・構えの基本が理解できたか	A	B	C
3		・指導者の話を真剣に聞くことができたか	A	B	C
4	杖の構え・基本技・単独動作 「本手打ち」「逆手打ち」「引き落とし打ち」 太刀の必要性・構え・使い方・打ち込み練習・気合 ・一本目「着杖」を杖と太刀が交代して練習 ・二本目「水月」を杖と太刀が交代して練習	・真剣に稽古できたか	A	B	C
4		・基本動作が理解できたか	A	B	C
5		・一本目が理解できたか	A	B	C
5		・二本目が理解できたか	A	B	C
5		・互いに協力して練習できたか	A	B	C
6	杖の構え・基本技・単独動作 「本手打ち」「逆手打ち」「引き落とし打ち」 太刀の必要性・構え・使い方・打ち込み練習・気合 ・一本目「着杖」を杖と太刀が交代して練習 ・二本目「水月」を杖と太刀が交代して練習 一本目「着杖」練習・試合	・真剣に稽古できたか	A	B	C
6		・一本目が理解できたか	A	B	C
7		・二本目が理解できたか	A	B	C
7		・互いに協力して練習できたか	A	B	C
7		・積極的に声を出したか	A	B	C
7		・試合について理解できたか	A	B	C
7		・相談をして審判ができたか	A	B	C
8	杖の構え・基本技・単独動作 「本手打ち」「逆手打ち」「引き落とし打ち」 太刀の必要性・構え・使い方・打ち込み練習・気合 ・一本目「着杖」を杖と太刀が交代して練習 ・二本目「水月」を杖と太刀が交代して練習 ・一本目「着杖」試合 ・二本目「水月」試合	・真剣に稽古できたか	A	B	C
8		・一本目が理解できたか	A	B	C
8		・二本目が理解できたか	A	B	C
8		・互いに協力して練習できたか	A	B	C
8		・積極的に声を出したか	A	B	C
8		・お互いを正しく評価できたか	A	B	C
8		・試合について理解できたか	A	B	C
9	杖の構え・基本技・単独動作 「本手打ち」「逆手打ち」「引き落とし打ち」 太刀の必要性・構え・使い方・打ち込み練習・気合 ・一本目「着杖」を杖と太刀が交代して練習 ・二本目「水月」を杖と太刀が交代して練習 ・一本目「着杖」試合 ・二本目「水月」試合	・真剣に稽古できたか	A	B	C
9		・一本目が理解できたか	A	B	C
9		・二本目が理解できたか	A	B	C
9		・互いに協力して練習できたか	A	B	C
9		・積極的に声を出したか	A	B	C
9		・お互いを正しく評価できたか	A	B	C
9		・試合について理解できたか	A	B	C
10	実技テスト 基本打ち 本手打ち・逆手打ち・引き落とし打ち	・真剣に稽古できたか	A	B	C
10		・積極的に声を出したか	A	B	C
10		・基本動作が理解できたか	A	B	C

4. 杖道の教育的価値や中学校体育での有用性（考察）

（1）日本の伝統文化性と所作礼法の習得

大学生の一般体育実技で杖道を実施した阿部（2011）によれば、学生の内省報告として、杖道は「人間形成や日本文化について、多くの人が考えられるようになる」、「武道未経験者に対して、武道の良さを伝えることができる」、などの感想が報告されている。

一般に武道の授業は、堅苦しく印象良からず捉えられがちだが、東広島市立志和中の取り組みでも、武道を通じた伝統文化性の理解と修得に効果が認められた、と報告された。礼儀作法を形式的な指導にとどめることなく、なぜその動きをするのか、なぜその所作は合理的なのかといった武道の特質を十分に活かした杖道授業は、日本で生まれた武道文化を継承し、礼法も含めた伝統的な身体動作を普段の生活で活用する技術を習得することが十分期待できる教材と言えよう。

（2）武道習得への意欲の喚起

筆者は平成21（2009）年度に、國學院大學正課必修実技授業（名称「スポーツ・身体文化Ⅰ」）の再履修生（1年次に単位未修得の学生）クラスで、杖道を試験的に導入したところ、受講生の出席率が飛躍的に向上したことを記録している。

具体的には以下の通りである（國學院大學H21「スポーツ身体文化ⅠA・B」）。

前期（ⅠA）履修者数：10 出席率：89.1% 単位取得率：100%

後期（ⅠB） 同 ：28 ：83.6% ：100%

平成20年度の再履修クラス（武道以外）平均と比較すると、

出席率：69.4% 単位取得率：72%

であり、一般的には修学意欲が低いとされる再履修学生において、明らかに履修意欲が向上していることが見て取れる。これは、杖道の種目特性が奏功しているのではないかと示唆されるものである。さらに、学期末アンケートでは武道初心者杖道稽古の継続意欲がみられたことも示されている（前期履修者のうち4名が後期も履修継続、1名が履修外受講した）。



図2. 再履修大学生の杖道授業風景（平成21年）

前出の阿部（2011）も、昇段審査を受審してみたいと継続意欲を見せた者がいたことを報告している。東広島・志和中学校実践事例（2010）でも、中学生の武道継続意欲が示されていた。

5. まとめにかえて

中学校での杖道による武道授業の実践、また大学一般体育での杖道の導入事例から、必修実技授業での杖道の可能性を提示してきた。そこから、中学校必修武道種目は柔道、剣道、相撲ばかりではなく、杖道もそのひとつとして、もっと積極的に導入が検討されてよいと考える。

杖道授業において、生徒は何によって達成感を得るのか。大学生では（阿部、2011）、「簡単」、「新鮮」、「手軽」、「力を合わせてできた」、「多くの人とできた」、「一つ一つ新しい形や打ち方を覚えていくので、楽しかった」など、自分の技術の向上を知ること、楽しさを見出す受講者が現れた。中学生でも、「評価の着眼点」を基にした目標設定が意欲を喚起し達成感を形成する上で特に有効であろう。

また大学生では昇段への志向が示されているが、中学生においても、独自の級審査導入などの模索がなされてもいい。現在の制度では3級以上が連盟組織の管轄となるが、4級以下は各指導現場で独自の級審査実施が可能である（筆者は担当授業にて独自の級審査を実施している）。

中学校必修武道授業を通じて、中学生が生涯体育としての継続性を武道に見出すことができるか、武道種目にとっては現実に大きな課題であるが、杖道にはその可能性を大いに期待できるだろう。

【参考文献】

- ・阿部弘生「武道授業における杖道導入へのとりくみ」、國學院大學人間開発学研究第2号、111-133、2011.
- ・「武道等指導推進事業（武道等の指導成果の検証）」調査報告書、文部科学省委託事業「武道等指導推進事業」調査研究協力者会議編、20-21、平成27（2015）年3月.
- ・「中学校学習指導要領解説 保健体育編」、東山書房、99,117、2008.
- ・平成21年度文部科学省指定「武道・ダンス必修化に向けた地域連携指導実践校」実践報告書、東広島市地域連携指導推進協力者会議編、平成22（2010）年3月.
- ・『剣道授業の展開』財団法人全日本剣道連盟編、平成21（2009）年4月.
- ・前原敏雄「杖道の教材化」、月刊剣窓6月号：40-41、平成22（2010）年.
- ・中村民雄「中学校武道必修化について」、武道学研究42-3：1-9、2010.
- ・鬼澤佳弘「中学校武道の必修化」、武道学研究41-3：35-41、2009.
- ・『和文化学習の創造－心技体一致の学び－』広島県東広島市立志和中学校編、26-31、2008.
- ・『和文化教育実践事例集』広島県東広島市立志和中学校編、62-65、2010.
- ・『全日本剣道連盟杖道（解説）』、（財）全日本剣道連盟編、平成15（2003）年4月.

（うへはらきちお 國學院大學人間開発学部健康体育学科教授）